都立 東京港野鳥公園 Tokyo Port Wild Bird Park 3周年

市民運動で誕生した公園創世記の話

■聞き手：上原　健（元・都立東京港野鳥公園チーフレンジャー、常務理事）

大田区の大森地先の海周辺には、かつて広大な遠浅の海と干潟が広がり、海苔の養殖や漁業が盛んだったが、1962年の漁業権放棄のあたりから、本格的に埋め立て工事が進んだ。

海が死んでいく一方で、広がっていった大井埋立地。そこに草が生え、水場ができると、思いがけぬことに、虫や鳥たちが集まってきた。当時、大田市場建設の計画があったが、その規模を小さくして、この場所を公園として残してほしいという市民たちの活動が自然発生的に起こった。その運動が東京港野鳥公園の前身である大井第七ふ頭公園（通称：大井野鳥公園）ができるきっかけになり、規模はしだいに拡大していく。

公園設立に貢献したたくさんの方々の中から3名の方に集まっていただいた。

左から、曽我、加藤、増田、上原（敬称略）

■座談会参加者

加藤幸子【かとう・ゆきこ】
作家。5歳から11歳までを北京で過ごす。北海道大学農学部卒業後、農林水産省農業技術研究所、日本自然保護協会勤務を経て、自然と人間の共生を主要なテーマに掲げ、創作を始める。『夢の壁』で芥川賞、『尾崎翠の感覚世界』で芸術選奨文部大臣賞を受賞。当会会員

増田直也【ますだ・なおや】
環境省環境カウンセラー。東京港野鳥公園の設立運動を経て、大田区を流れる川「内川」の保全活動に参加。親子で多摩川を遡る「多摩川探検隊」など、大田区の環境保全グループの設立などに多く関わった。2001年に日本初のコアジサシ屋上営巣地造りを主旨にNPO法人リトルターン・プロジェクトを設立。著書に、たくさんのふしぎ「コアジサシ ふるさとをなくした渡り鳥」など。当会会員

曽我千文【そが・ちぶみ】
東京港野鳥公園、ウトナイ湖サンクチュアリでのボランティア活動が動機となり、都立公園の整備・管理を行う東京都職員に。夫もボランティア仲間で、ひとり息子はお腹の中から野鳥公園通い。日本野鳥の会では、野鳥誌編集委員、評議員を経て、現在監事を務める

■構成・文：編集部

――みなさんが野鳥公園に関わったきっかけなどを教えてください。

増田直也（以下、増田）　私は、もともとこのあたりに生まれて育ちました。海が近いので、中学生のころ、父と釣りに出掛けましたが、いくら歩いても海に出会えなかったんです。大学生になってから、自転車で埋立地をひとりで訪れるようになったころ、長谷川充弘さん（※1）と日本画家の堀越保二さん（※2）が当時の都知事に直訴したことによって、バンのひながいる池の埋め立て工事をストップさせたという1973年の朝日新聞の記事を見て、心を動かされました。

そこに載っていた長谷川さんの連絡先にコンタクトして会いに行ったことがきっかけで、それ以降は、長谷川さんと、長谷川さんを通して知り合った堀越先生と3人で出かけるようになりました。砂礫（されき）地で営巣しているコアジサシやチドリの仲間。大きな水たまりが池になって魚やザリガニが湧いてくる。そんな〝ワンダーランド〟に魅せられたのです。

――同じ1972年に、加藤さんが代表を務める「小池しぜんの子」が発足していますよね。

加藤幸子（以下、加藤）　この頃、子どもが小さかったんですが、自分が自然が好きで、子どもをダシにして野外に出るために作ったような会でしたね（笑）。いっしょに活動していたお母さんたちは、元々は自然がとくに好きだったわけではなかったのでしょうけれども、子どもたちがすごく楽しんでくれたのもあって、喜んでくれていましたね。

何もしなければ大田市場になっていたが 市民運動が始まり3.2ヘクタールを確保

――もともと市場予定地として埋め立てられたわけで、公園は存在せず、そのままいけば広大な市場になっていたわけですよね。

加藤　「小池自然の子」に所属していたお母さんたちには活動的な方が多くて、1975年には、「こんなに自然が残っている場所を開発でなくすのはもったいない。子どもたちのために残してほしい！」という署名付きの請願を区や都（の議会や議員）に対して出していました。

当時、議員の皆さんは自然環境のことなんてぜんぜん気にも留めていないようでしたが、賛成してくれる方もいたので、身近な自然の大切さを広く知ってもらうきっかけになったと思います。実際に、その年の9月に、大井第七ふ頭公園がサンクチュアリ及び野鳥観察のための公園として整備されることに決定しました。

増田　ぼくら3人で結成した「大井埋立自然観察会」は1975年から定例で自然観察会をはじめました。その翌年開催された「大井埋立地の自然」展で加藤さんと初めて出会ったわけですが、それまでは埋立地で観察会をひらき、会報を出すだけのような活動だったのですが、加藤さんに出会ったことで、市民運動的な方向にも目を向けるようになりました。加藤さんの当時の印象は、素敵な奥様でしたが、その行動力には目を瞠（みは）ることが多かった。

加藤　もともとは大人しくて、そんな運動をするようなタイプではなかったんですけどね。

増田　そういった活動をしていて、しばらくすると日本野鳥の会の人たちが突然やってきたんですよね（1978年）。職員や会員さんが、鳥だけでなく植物や虫などにもやたらとくわしくて、すごい人たちだ！　という印象でしたね。私たちはにわか知識で観察会を開いていましたから。あとから調べると、高野伸二さん（※3）や川田潤さん（※4）、市田則孝さん（※5）といったそうそうたる方の名前がありました。

曽我千文（以下、曽我）　私は、中学1年生で野鳥の会に入会し、高校生になった（1979年）頃、野鳥誌で、野鳥公園が人によって考えられ、手作りされているという記事を読み、「そこに行かなくちゃ！」と東京の世田谷区からひとり、電車に乗って行ったのが、大井埠頭（ふとう）に足を踏み入れたきっかけでした。

自然が好き、野鳥が好きな女子は学校じゃ変わり者。それが野鳥公園では、大人の人たちがいろいろと親切に教えてくれて、気がついたらボランティアになっていました。上原さんがレンジャーだったときにも、新しいネイチャーセンターの展示に、大学生だった私のアイディアを積極的に採用してくださって、絵も上手だねってほめてくれてうれしかったですね。

加藤　1979年ごろ（3.2ヘクタール時代）から「小池しぜんの子」「大井埋立地自然観察会」「日本野鳥の会」などの5団体が一緒になって、自然公園として残してほしいという活動をしていくわけですが、それぞれ特色がありましたね。うちの団体は、とにかく子どもたちのために自然を残してほしいと過激に訴えていました。

3.2ヘクタールからの拡大期 市民運動が盛んな頃

――野鳥公園は、市民運動によってできたことがとても画期的でした。1980年には、11もの団体が「大井自然公園推進協議会」として6万人もの署名を集めて、東京都に要請していますよね。

増田　11団体ということ自体が圧力になりました。

加藤　どうして署名がこんなに集まったのか、と不思議ですよね。自分がこの活動のなかで一貫していたのは、自然が好きでたまらないので（自然のためになりたいというよりも）、やるしかないと、体が動いてしまうといった感じでした。時代全体の潮流が自然を回復しようとか、自然と親しもうとか、そういうことを考える方向に変わりつつあったのかもしれません。

曽我　1981年に大井自然公園懇談会が30ヘクタールのマスタープランを、当時の鈴木俊一都知事に提出しています。この案を練るために、多くの市民に「この案をどう思いますか？　何を付け足すべきだと思いますか？」ということを問いかける集会を何回も開いていました。その集会に来た方は必ず署名をしてくださり、用紙を持って帰って

繰り返した草の根運動が署名6万人につながった【曽我】

この写真は著作権の関係により掲載ができません。

※1　現「東京港野鳥公園協議会」代表を務める
※2　日本画家。東京芸術大学美術学部絵画科日本画名誉教授。NPO法人リトルターン・プロジェクト顧問
※3　野鳥研究家。日本野鳥の会東京支部長、日本鳥類保護連盟理事なども務めた
※4　元東京支部長、野鳥生態映画製作者
※5　山階鳥類研究所を経て、日本野鳥の会に勤務し、昭和50年に事務局長、59年からは常務理事を務めた

署名を集めてくれていました。

増田　そういった市民に直接訴えかけるような機会をたくさん設けましたが、反対する人は誰一人いませんでした。

曽我　くり返し、くり返しの草の根運動が、6万人分という署名につながったのだと思います。

1983年、26・6ヘクタールの合意形成と加藤さんの芥川賞受賞（1982年）

――1980年代はまだまだ日本経済も成長期で、開発問題に待ったをかけて成功した事例としては稀有ですよね。

増田　大田区が市民側に賛同して、「大田市場の規模を半分にして、半分は野鳥公園として残してほしい」という要望を、市民団体と一緒に東京都に提出したということがありました。行政側が環境保全団体と一緒にアクションしたということは、とても画期的だったと思います。みんなの積年の誠意が理解されたのだと思います。

――加藤さんが、主婦から芥川賞作家になったというのも、この時期でしたね。

加藤　私は、この頃、要望書などを突撃隊のように出しに行っていたのですが、芥川賞をとった後は、相手の対応が違いすぎて笑ってしまいました。とてもやりやすくなった面もあります（笑）。

曽我　ベストなタイミングでしたよね。

――まだまだ公園としての面積が狭かった大井野鳥公園時代は、いろんな事件もあって、まさにカオス、楽しかったですよね。

加藤　何が起こるかわからなかったよね。公園に隣接する広大な埋め立て地は、自由に入れたし、あの時代がいちばん楽しかった。

一同　うんうん。

埋め立て地の草原で話しこむ協議会の面々。時には鍋をかこむこともあった。（写真提供／長谷川充弘）

6万人分集めた署名（『野鳥』誌1990年1月号より、撮影／大塚豊）

大田区が市民運動に賛同したことは、大きな追い風になった（1980年）【増田】

曽我　イヌやネコの死体も見つかるような場所でしたよね。

増田　野犬もたくさんいました。3グループぐらいがそれぞれ、特徴のある狩りをしていたのも面白かった。頭脳的で、人が仕掛けた罠にかかった獲物を横取りしていたものもいました。

加藤　イヌがほんとうの野生動物でしたね。カッコよかったです。

増田　タバコや火遊びが原因なのか、野火もたびたび起きたけれども、一番規模が大きかったのは、30ヘクタールを焼いた1978年6月4日のものでしたね。消防車7台、ヘリコプター1台の消火活動だった。

加藤　鳥も繁殖期だったから、被害があったかもしれませんね。

NHKドラマの舞台になったこととと1982年のフェスティバル開催

――1982年のバードウォッチング・フェスティバルには、約1万人もの人がやってきました。

増田　屋台もたくさん出て、まさに〝お祭り〟でしたね。野鳥のメッカとして知られるようになっていましたから、日本全国、海外からも人が来ていました。1980年当時の新聞記事に、当時の東京都内の野鳥の生息状況（種類数）でみると122種で、多摩川（2位　102種）や高尾山（4位76種）などを抑えて、大井埋立地が1位なんですよね（1978・1・1～12・31）。

曽我　1978年に、汐入りの池にソリハシセイタカシギが出て、めずらしいので話題になって、野鳥公園の知名度が上がったのをよくおぼえています。当時、汐入りの池とバンの池で鳥類繁殖調査もしていたんですが、一周回ると、バンやカイツブリなどの巣が山ほどあって、「もう数えたくない！」と思うほどでした。

増田　モズもたくさんいて、周囲を囲んでいる有刺鉄線に、子ネズミ、ミミズ、バッタやチョウなどのモズの早贄が陳列物のようにずらりと並んでいたのも印象に残っています。

加藤　それだけたくさん鳥がいたということよね。

増田　倍賞千恵子さん主演のNHKテレビドラマの『友だち』という作品が1987年に5回シリーズで放映されましたが、その舞台となったのは、大井野鳥公園でした。このドラマのおかげで、鳥を見るという趣味が世に知られ、市民権を得るようになったと思います。

曽我　たしかに。あれくらいの時期から、双眼鏡を持って歩いていても、不審に思ったおまわりさんから声をかけられたりしなくなりました。

増田　このドラマを書くときに、脚本家の山田太一氏は加藤さんに取材に行っていると何かに書いてありました。

加藤　山田さんと打ち合わせみたいなものはした記憶はありますが、内容についてはおぼえていないんですよね（苦笑）。

曽我　上原さんもレンジャーとして映っていましたよね。あの放映で急に来園者が増えましたから、すごい影響力があったと思います。ドラマに出てくる、実在しないレストランの場所をよく聞かれて、困ったことも思い出です。

増田　ドラマが終わった後、倍賞さんも何度か来られたそうですよ。

野鳥公園とのかかわりで得たものと今後の野鳥公園に求めること

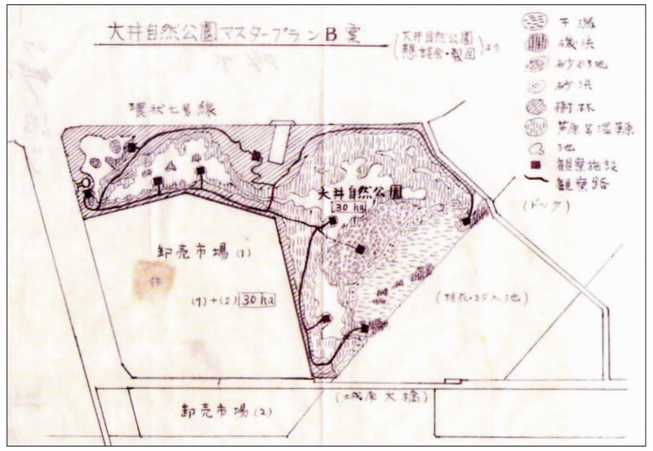
――できあがった野鳥公園に対しては、みなさんの評価はいかがですか？

増田　26・6ヘクタールという面積は、もともとあった面積に対しては小さいかもしれませんが、都会のサンクチュアリとしては、環境保全のシンボルとしての存在意義は大きいと思います。ただし、当初考えていたよりも周囲の環境が悪化しているのは残念です。私はコアジサシの繁殖地の整備を公園内でしているのですが、野猫の問題にも悩まされています。目黒の自然教育園のようにもっと管理されたり、科学博物館的な要素も取り入れて良いと思っています。日本の野鳥の情報を世界に発信するセンターのような役割も果たしてほしいですね。

加藤　私は子どものころから自然が好きで、人間は自然と離れては生きてはいかれないという考え方をもっています。だから、管理なんて最低限でいいので、都心にそのままの、無秩序な自然があるということでいいと思っています。

曽我　一介の学生が野鳥公園に出会ったことで、大好きな野鳥のために恩返ししたいという思いを、ボランティア活動を通じて実践することができました。私にとって、ほんとうに人生に大きな影響を与えてくれた夢の畑です。野鳥公園がこれからも、たくさんの人にとってそういう場所になってほしい、いつも野鳥たちに寄り添える心のふるさとのような場所であってほしいと思っています。

――貴重なお話をありがとうございました。



堀越保二氏が手描きした「大井自然公園マスタープランB案」（所蔵／増田直也）

『東京港野鳥公園の誕生、そして現在』
加藤幸子
（2004年・藤原書店・2,376円）

1986年三省堂刊「わが町東京野鳥の公園奮闘記」の改題改訂。野鳥公園設立への歴史を綴ったドキュメント。

都心にそのままの自然を！人間は自然から離れては生きてはいけない【加藤】